

【文化構想学部 現1年生 対象】

2024年度における複合文化論系への進級について



INTERDISCIPLINARY
STUDIES OF CULTURE

目次

1. 複合文化論系とは

2. 教員・助手紹介

3. プログラムについて

4. ゼミと履修モデル

酒井智宏先生 ことばの科学・ことばの哲学

陣野英則先生 ことばと文学・ことばと美意識

新規嘱任者 ことばの歴史・ことばの地理

寺崎秀一郎先生 文化ツーリズム論

國弘暁子先生 宗教への人類学的アプローチ——宗教の人類学

松前もゆる先生 移動・移住の人類学——移動する人やモノ、および多文化状況の研究

箕曲在弘先生 環境と開発の人類学

坂上桂子先生 都市と美術

宮城徳也先生 文化変様論——文化変容とその展開

山田真茂留先生 集合的アイデンティティの諸相

小林信之先生 現代の文化哲学——美／死／エロス

高橋利枝先生 メディア・コミュニケーション論——グローバリゼーションとメディア・AI（人工知能）

5. 進級者受入方針

6. 教育課程編成方針

7. 2022年度ゼミ論文題目

8. 複合文化論系室について

複合文化論系とは

「時空を超え、文化の複合的な構造を解明」

複合文化論系は、社会・文化現象を総合的に研究する4つのプログラム（言語文化、人間文化、超域文化、感性文化）から成り立っています。その研究対象は幅広く、衣食住をはじめ、言語、文学、芸術、哲学、思想、宗教、美意識、メンタリティー、政治、経済、医療、さらには国際関係をも内包しています。

これら4つの領域は独立しているようでいて、その実は極めて強く結びついています。たとえば活版印刷術によりルネサンス期に出版された古典ギリシア語の辞書。そこでは語の意味がラテン語で説明されています。これはまぎれもなく「言語文化」の産物ですが、同時に、ルネサンス世界による古代ギリシア世界の受容として、地域と時代を超えた「超域文化」の問題ともなります。また、人間が作り出す新技術とさまざまな文化現象を考えると、「人間文化」に関わりますし、そしてこの人間の活動を具体的かつ普遍的に捉え、技術や文化のはらむ微妙なニュアンスを問うならば「感性文化」の問題となるでしょう。

したがって、本論系でも各プログラムは緊密に連携し、地域や時代、既成の学問ジャンルの枠を超え、各文化圏相互の関係分析や比較研究を行うことにより、人間が織り成す文化の複合的な構造を根本から解き明かすことを目指しています。そのために海外留学を奨励し、外国研究機関との連携のもと、国際舞台で活躍できる人材を養成しています。また、多種多様な科目と履修形態により、影響・対比研究やアーカイブ操作、フィールドワーク、現地実地研修、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションなど、さまざまな研究手法と幅広い視野を身につけられることも本論系の特長です。

言語文化

酒井 智宏

ヨーロッパ言語学、言語哲学

陣野 英則

日本古典文学、平安時代文学、物語文学

新規嘱任者

人間文化

國弘 暁子

文化人類学、宗教人類学、ジェンダー研究

寺崎 秀一郎

中南米考古学

松前 もゆる

文化人類学、移動・移住の人類学、仕事の人類学、ジェンダー、エスニシティ

箕曲 在弘

文化人類学、開発人類学、経済人類学

超域文化

坂上 桂子

美術史、モダンアート

宮城 徳也

西洋古典学、ルネサンス研究、異文化受容研究

山田 真茂留

社会学、集合的アイデンティティ研究、現代社会論

感性文化

小林 信之

美学、感性文化論、現代哲学

高橋 利枝

メディア・コミュニケーション論、異文化コミュニケーション論

【助手】

海老澤 圭：文化人類学、ラオス人民民主共和国、食文化

阿達 佳子：美学、解釈学

プログラムについて

言語文化プログラム

ことばは人間のあらゆる精神活動の基盤である。ことばに関して研究することは、言語学者だけの仕事ではない。人文科学を志す者にとって、ことばの問題を避けて通ることは不可能である。本プログラムは、ことばに関するさまざまなテーマに関心を抱く学生に、言語学の基礎を踏まえつつ、各自の研究を自由に展開することができる場を提供する。もちろん本プログラムでは、ことばの問題を通じてさまざまな文化現象を研究することも可能である。

人間文化プログラム

本プログラムは、時間と空間の枠組みを超えて、人間文化の複合的諸相を統合的視点に立って解明することを目指す。授業に関しては、フィールドワークが重視され、その構成は理論と実践をつなぐインターフェイスの科目群からなる。まず文化人類学の理論と方法論を体系的に習得した後、ゼミにおいては人類学の知識を実践の場に還元する応用人類学に重点を置いて学ぶことになる。卒業後の進路として、国際機関への就職、大学院への進学（海外も含む）などが挙げられる。

超域文化プログラム

異なる複数の文化体系が接触する場において、どのような現象が生じ、社会・文化のどのような変容が見られるのか。過去の異文化接触がいかなる新たな文化の潮流を形成していったかを知り、また現代世界の諸問題を異文化コミュニケーションの現実として多角的にアプローチし、多様化する世界の現在から未来を展望していく。また、言語・民族・国家・時代を超えて多様に連関する文学・芸術活動を比較・対照しつつ検討することで、人間の表現活動全般についてのより深い理解と認識を獲得することを目的とする。

感性文化プログラム

「味わい」、「装い」、「演じ」、「創り」、「愛し」、そして「死を恐れる」人間。しかしなぜ私たちはそうせずにはいられないのか。本プログラムはこの問いを前提として、人間の日常の行為と情動を、文化・社会のダイナミズムにおいて論ずる。それは、新たな思考と感性の可能性を探求することでもある。制度化された学問それ自体に対しても批判的であるような新しい学問的視野とその方法を模索し、文化の未来学を目指すと同時に、教員と学生の共同作業を実践するなかで、文化創造に向けての脱時間的・脱地域的な視野と価値理論を獲得することを目的とする。

ことばの科学・ことばの哲学

言語または言語学に関心のある方のためのゼミです。言語学はみなさんの多くにとって馴染みのない分野ですので、以下Q&A形式でゼミを紹介します。ぜひイメージをつかんでください。

Q1. 研究テーマに制限はありますか？

A1. ありません。これまでに次のようなテーマに関わるゼミ論文が作成されました。音楽と言語、絵画と言語、ジェンダーと言語、バーチャル方言、ファッション雑誌におけるカタカナ表記、やさしい日本語、誤解と語用論、笑いと語用論、日本語の「思う」と「考える」の異同、日本語の疑似条件文、日本語の複数標識「たち」、認知言語学、比較言語学（とくにゲルマン語）、etc.

Q2. 対象とする言語に制限はありますか？

A2. ありません。日本語を含めて世界のどの言語を選んでもOKです。時代も問いません。複数の言語の対照研究や、エスペラントのような人工言語の研究も考えられます。あるいは、対象言語を限定せず、「そもそも言語とは」という一般言語学的・生物言語学的・哲学的な考察も歓迎します。

Q3. {たくさんの言語を知っているand/or特定の外国語に堪能である} 必要がありますか？

A3. ありません。常識的な日本語力と大学受験程度の英語力があれば大丈夫です。プロの言語学者の中にも語学が苦手/嫌いな人はたくさんいます。「言語学」と「語学」は違います。

Q4. 語学好きである必要はないとのことですが、では言語の研究にとって必須の能力とは何ですか？

A4. 文献を精読し、人類が気づくことさえなかった問題を発見・共有し、粘り強く丁寧な議論を組み立てて唯一の正解に至る科学的・哲学的思考力です。全員が興味をもってこの課題に取り組めるように、ゼミ生が話し合って統一テキストを選び、互いに助け合いながら、一行一行時間をかけて輪読します。



学生像

日本語を含む世界の諸言語を対象とした理論言語学・言語哲学、ならびに言語学に関する科学哲学的研究を志す学生。

将来の活動フィールド

外国語・日本語関係の教員・研究者、出版・放送・ジャーナリズム関係など。

履修が望ましい外国語

特に指定しない。

ブリッジ科目

言語学入門／認知言語学入門／語用論入門／ヨーロッパのことばと文化／フランス語学概論

ゼミ・演習科目

【ゼミ】言語文化ゼミ（ことばの科学・ことばの哲学）

【演習】日常言語の論理学／文法の理論／言語と文化／意味と文脈

陣野英則先生

ことばと文学・ことばと美意識



担当教員が日本文学を専攻していることから、授業の中で教員が提示する実例、課題などは、日本語と日本文学に関わるものが中心となる。また、美と美意識に関することからも、日本文化関係を取りあげることが多くなるだろう。とはいえ、日本のことば、文学、文化等々が「日本独自のもの」であるといった前提を極力排して向きあうことを重視するので、各人のゼミ論文でも、積極的に日本以外のことば、文学、文化とのかかわりを考えてほしい。

あわせて、(1) 前近代のことば、文学、文化に留意すること、(2) 近代以降に西欧のことば、観念などの接触がもたらしたものを意識すること、(3) 日本の言葉、文学、文化が海外でどのようにみられ、また受容されているのかをとらえること等々により、複眼的な思考の芽をはぐくむことを期待する。

学生像

文学（とりわけ日本の古典から近現代の文学）に関心をもつ学生。ことばと美意識のあり方に関心をもつ学生。世界の中で日本の文化がいかにとらえられているのかということに関心をもつ学生。

将来の活動フィールド

一般企業（特に文化活動に関わる業種など）、出版・ジャーナリズム・広告関係、公務員、教職（中学校・高等学校の国語科）、大学院進学および研究職（日本の文化・文学など）。

履修が望ましい外国語

特に指定しない。

ブリッジ科目

日本文学史1～6／神話と伝説の世界／物語文学の世界／和歌文学の世界／鎌倉・室町の文学／近世小説と俳諧／近代の文学と文化／現代の文学と文化1・2／文化の哲学／近代日本の思想空間

ゼミ・演習科目

【ゼミ】言語文化ゼミ（ことばと文学・ことばと美意識）

【演習】日本の美意識／日本古典文化の受容と変容／世界のなかの日本のイメージ

ことばの歴史・ことばの地理

ことばを使うのが人間ですから、ことばが誰もが使える身近な存在であることは、体験的によく知られています。逆説的ですが、だからこそことばを対象とした研究は分析の方法が重要です。ゼミ担当の私は、日本語の歴史（特に音韻史）が専門で、地域言語研究も扱ってきました。広く言えば日本語学の研究者ですから、分析の方法も日本語学を中心とした指導が中心となります。その特色は、ことばを自律した存在と仮定して、主として文献調査やフィールドワークを通じて量的に捉える点にあります。受講者にはまずこの点を大事にしてもらいたいと思います。

一方、人間の文化的活動は、ことばを起点として多様かつ多次元的に行われてもいます。授業内容にも記したように、文化、社会、メディアをことばと関連付けて理解することもまた、ことばの研究の面白さです。ただし言うまでもなくこのゼミはことばのゼミですから、関心の主軸はあくまでもことばに置いてください。その点にさえ留意すれば、受講者の関心に応じたかなり多様な研究対象を選ぶことができるでしょう。ゼミにおける研究は皆さんの4年間の学びの集大成でもあります。自己のビビッドな関心や問題意識をことばの学問の上に形にしてくれることを望みます。

学問は本来、知的な楽しさを有しています。問題領域を注意深く設定し、あとは研究を楽しむ姿勢も重要です。またゼミ生同士の交流も、ゼミの意義の一つだと思います。グループワークや、合宿なども楽しむ姿勢で参加していただければと思っています。

学生像

日本語を主な対象として言語変化・歴史や地理的変異等に関心を持ち、実態調査を通じて言語学・言語文化論的に研究する意志を持つ学生。

将来の活動フィールド

日本語学研究者、日本語・国語教員、出版・広告・ジャーナリズム関係など。

履修が望ましい外国語

特に指定しない。

ブリッジ科目

現代の日本語／日本語の文化史／ことばと社会／日本語学概論1・2／日本語史1・2／言語史の方法

ゼミ・演習科目

【ゼミ】言語文化ゼミ（ことばの歴史・ことばの地理）

【演習】現代日本語研究1・2／日本地域言語研究1・2

寺崎秀一郎先生

文化ツーリズム論

1987年に提唱された「持続可能な開発」の一形態として観光開発が注目され、近年、観光産業は世界経済の中で、重要な位置を占めるに至っています（2008年にはその経済規模は世界の国内総生産の（GDP）の約9.9%＝5兆8,900億ドルに達しています）。増大する観光客のニーズは多様化していますが、その中で、各地の文化/文化遺産も「資源」としてとらえられる傾向にあります。

ゼミ担当である私自身もメキシコ、チアパスのラカンドン族の集落で、ジーンズにTシャツ姿でマウンテンバイクに乗っていた若者が、観光客が到着した途端、彼らの民族衣装である貫頭衣に着替える姿を目の当たりにしたり、ホンジュラスにおいては先スペイン期遺跡の保存修復整備事業に青年海外協力隊の隊員として参加し、その経験をきっかけに中米における主要観光資源である先スペイン期遺跡と現代社会の関係に注目するようになりました。本ゼミではツーリズムということを入りに、文化/文化遺産を継承する人びと＝ホスト側とそこを訪れる観光客＝ゲスト側の双方において、文化はどのように語られ、あるいは再構築されていくのか、あるいは、その未来はどうなるのか、といった問題を起点に人類社会の多様性や多文化共生型社会について、ゼミ生のみなさんと共に考えていきたいと思っています。研究対象地域は、日本を含む世界中です。



学生像

- ①「文化資源」の現状と課題、その将来について関心がある学生。
- ②地域文化の継承と発展に取り組む気概のある学生。
- ③フィールドに出向き、現地の人びととの協同を志す学生。

将来の活動フィールド

大学院進学、旅行、観光、マスコミ、銀行、損保、食品、製薬、公務員等。つまり、進路としては、他ゼミ・他論系・他学部と比較して大きな差異はない。なお、3年生を対象に秋学期（10月頃）には就活を終えた4年生による就活ガイダンスを実施している。

履修が望ましい外国語

学術論文を読解できる英語は最低限必要。その他の外国語については、研究対象地域による。どんな地域で何をやりたいかということが第一義であり、外国語は当人の目的を達成するための手段であることを自覚の上、努力してほしい。

ブリッジ科目

文化人類学の最前線1・2／文化人類学1・2／国民国家と文化
（上記科目については1～2年次に履修することが望ましい）

ゼミ・演習科目

【ゼミ】人間文化ゼミ（文化ツーリズム論）

【演習】民族文化論／物質文化論／植民地主義と人類学／グローバリゼーションと人間の経済／開発人類学

國弘暁子先生

宗教への人類学的アプローチ——宗教の人類学

「無宗教」という言葉の使い方について考えてみましょう。特定の儀式や教義に基づいた組織に関与しないことを理由に「無宗教です」と答えるひとは多いと思います。その一方で、正月には神社で祈禱を行い、夏の神事に参加し、お盆の時期には先祖供養をする。これらの行為は、国外の人からすれば立派な宗教的な行為であり、言動が矛盾していると彼らから思われてもおかしくありません。このような宗教に関する認識のズレが生じるのは、日本語の宗教という言葉の歴史にあるという指摘があります。日本語の宗教とは、西洋社会のキリスト教のような教義体系を意味する言葉として、明治初期に、西洋人との交渉の過程でつくられたものです。よって、地縁にもとづいた神事への参加や先祖の供養といった行為は、日本語では宗教という言葉の括りに入らないというわけです。



このような言葉の成立背景を踏まえたうえで、日本語の宗教という括りを一旦取り払ってみましょう。そして、祈る、弔う、祝うといった人間の行為に着目して日本国外を見渡したとき、これまでは宗教の問題だから私たちには関係ないと片付けていた問題が、実は私たちにも相通ずる問題であったことに気づくかもしれません。私たちとは異なる環境で暮らす人々の営みについて学ぶことは、私たち自身のあり方を問い直す作業にもなります。

このゼミでは、様々な地域で生起する問題群に対して関心を示し、柔軟な思考でもって解釈しようとする態度、そして、慣れ親しんだ考え方から距離を置いて、別の視点から現状を捉え直してみようとする姿勢をもつ人物の参加を歓迎します。

学生像

自分とは異なる生活習慣や考え方をもつ人々に対して興味関心を持ち、その人々と積極的に関わろうとする気概のある学生。

将来の活動フィールド

一般企業への就職、公務員、大学院進学、海外留学など

履修が望ましい外国語

英語は必須。その他、調査研究に必要となる言語。

ブリッジ科目

文化人類学の最前線1・2／文化人類学1・2／アジアのジェンダーとセクシュアリティ

ゼミ・演習科目

【ゼミ】人間文化ゼミ（宗教への人類学的アプローチ）

【演習】文化人類学入門／フィールドワーク入門／コミュニティとナショナリズム／ジェンダー人類学／植民地主義と人類学

移動・移住の人類学——移動する人やモノ、および多文化状況の研究——

移民や難民についての話題がしばしばニュースで取り上げられるなど、人の移動・移住は、現代世界において最も注目される社会現象のひとつと言えます。日本においても、周囲を見渡せば、さまざまな場で外国人の姿を見かけるようになりまし、また、災害等によって移動・移住を余儀なくされる人は国内外で存在しています。こうしたことを背景に、本ゼミでは、移動・移住をキーワードとして私たちのくらす日本を含む現代世界をとらえ直し、移動・移住がうつし出す文化や社会のありようと諸課題について、文献購読とフィールド調査から多角的・実証的に検討することを目指します。



また、現代世界において人の移動・移住を考えることは、移動する人々と受け入れる人々との関係、つまりは異なる文化的背景を持つ人々がいかに共にくらし、地域社会を形成していくかを問うことにもつながります。さらに近年、外国出身の女性たちが先進諸国のケア労働を担い始めたことによる「国際移民の女性化」「ケアの国際分業」といった現象も指摘されていて、ジェンダーや労働、家族などを問い直すことにもつながると考えられます。移動・移住を切り口に、国際社会の課題から身近なことから、文献調査とフィールド調査から得られる知見を共有しながら、考察を深めていきましょう。

学生像

- ①自分とは異なる環境や立場にある人たちの生き方やものの見方、生きる現実に関心を持つ学生。
- ②国際的、あるいは国内での人やモノの移動、それにとまなう社会の変化や課題について考えてみたいと希望する人。

将来の活動フィールド

一般企業、公務員、国際機関やNGO・NPOへの就職、大学院進学、海外留学などが期待される。

履修が望ましい外国語

英語。その他、調査研究に必要な言語についても積極的に履修することが望ましい。

ブリッジ科目

文化人類学の最前線 1・2 / 文化人類学 1・2 / 国民国家と文化

ゼミ・演習科目

【ゼミ】人間文化ゼミ（移動・移住の人類学）

【演習】文化人類学入門／フィールドワーク入門／植民地主義と人類学／コミュニティとナショナリズム／ジェンダー人類学／グローバル化と人間の経済

環境と開発の人類学

このゼミでは、広く「環境」と「開発」に関する諸現象について、文化人類学の観点から学びます。文化人類学の観点とは、すなわち身近な生活空間から離れた場所において得られる「異和感」をもとに立ち上がる知を指します。つまり、自分の馴染みの人間関係から切り離された場所において駆動する思考であるといえます。したがって、このゼミでは基本的な文献購読だけでなく、フィールドワークを重視します。

具体的には、日本国内の農山漁村における人々と自然環境の相互関係（地域振興やコミュニティ開発、資源の利用や管理を含む）、発展途上国における開発問題（教育や衛生、ジェンダーといった社会開発やSDGs関連）といったテーマを設定し、各自フィールドワークを実施し、教室内での議論を経て、ゼミ論を完成させます。

12月末には希望者のみ、東南アジアのラオスでの「フィールド調査実習」に参加できます。ゼミ担当教員が長年フィールドとしてきたフェアトレードコーヒー生産者の住む地域に10泊11日間滞在し、基本的な農村調査の方法を学びます（農家のホームステイやコーヒーの収穫加工体験を含む）。受入先との関係から人数制限があります。ただし、状況によっては中止の可能性もあります。2021年度から始まるゼミですので、分からないことが多いでしょう。適宜、ゼミ生の希望や意見を踏まえながら、柔軟にゼミを運営していきたいと思えます。



学生像

自分とは異なる世界に生きる人々の暮らしに興味や関心がある人。国内外問わず旅好きな人。参与観察やインタビューといったフィールドワークに挑戦してみたい人。

将来の活動フィールド

一般企業や公務員、教育機関。国際機関やNGO・NPOの職員。大学院進学および研究職。

履修が望ましい外国語

英語。その他、フィールドワークに必要な言語を履修していることが望ましい。

ブリッジ科目

文化人類学 1・2 / 文化人類学の最前線 1・2 / 環境と人間 1・2

ゼミ・演習科目

【ゼミ】人間文化ゼミ（環境と開発の人類学）

【演習】グローバル化と人間の経済 / 文化人類学入門 / フィールドワーク入門 / 開発人類学 / 植民地主義と人類学

都市と美術

私たちの暮らす都市には、広告やデザイン、ファッション、パブリックアート、建築空間が豊富にあつて、“視覚文化”に溢れています。また美術館や画廊など“アートの展示場”では、つねに展覧会も開催され、視覚（ヴィジュアル）的要素は、現代社会において大きな意味をもつようになりました。そこには、社会のさまざまな問題が反映され、古今東西の多様な文化が共存し、混在するのを見出せます。現在の東京では、都市の生活空間にかかわる問題は、とりわけ重要な課題となっています。授業ではこうした身近な都市環境を、とりわけ美術という視点から捉え、仲間とともに実見・体験し、分析・考察を行っていきます。アートと社会にかかわる問題を、都市、異文化、生活を切り口にとらえることが目的です。授業では私たちの豊かな生活や社会を生み出し、発展させる要因として、アートやデザインはどのような力をもちえるのかその可能性を探ります。



学生像

- (1) 都市とアート（パブリックアート、街並み、建築）、芸術と社会（美術、視覚文化、デザイン、広告、ファッション、ミュージアム）の問題に関心のある学生。
- (2) 国際交流（とくに日韓の交流）に貢献したい学生。（高麗大学、成均館大学、漢陽大学、慶熙大学との交流授業をソウルで行う予定です。）
- (3) 西洋、東洋、日本のどこかに片寄るのではなく、より広い視野から見渡し、考えることができるようになることを目指す学生。

将来の活動フィールド

*アートに関わる知識や異文化交流の体験を活かせる場。 *これまでの具体的就職先および進路：広告会社、出版社、航空会社、商社、通信会社、銀行、保険会社、公務員、大学院進学（海外を含む）など。

履修が望ましい外国語

自分が研究テーマとしたいトピックともっとも関係ある言語を習得していることが望ましい。

例：ウォーホルの広告美術→英語／ガウディの建築→スペイン語／バウハウスのデザイン→ドイツ語／未来派の絵画→イタリア語／デザイン都市ソウルのメディア戦略→朝鮮語／ゴッホ、モネの夢見た日本→フランス語 * 韓国の大学との交流授業をしますが、とくに韓国語の知識が必要というわけではありません。

ブリッジ科目

西洋近代美術／芸術論争の歴史／芸術と社会（都市と美術） 以上にあげた科目のほか、アート、イメージ、美術、視覚文化に関連する内容の講義科目を、地域・時代にかかわらず、なるべく幅広く履修しておくことが望ましい。

ゼミ・演習科目

【ゼミ】超域文化ゼミ（都市と美術）

【演習】創造の交流点／世界のなかの日本のイメージ／世界の造形芸術／世界の都市とアート／芸術思潮の越境

文化変様論——文化変容とその展開

異文化が他の文化との接触によって新しい文化を生み出していくことに興味を持つ学生を対象に、文化の変容と創成を一緒に考えていきます。個々の文化を深く学び、理解するためには多くのハードルをクリアしなければなりません。本ゼミはその出発点に立つことを企図して、手に届く範囲の日本語文献、英語ウェブページを批判的視点を持って精読しながら、何かを理解するために次に何をすべきかを自分の頭で考えていく姿勢をともに築いていきたいと思っています。

担当教員の関心はイタリアを中心とするヨーロッパがいかにギリシャ・ローマ文化の影響を受けながら、それとは違うものを作り上げていき、それが日本を初めとする世界各地に影響を与えたことにありますが、別の視点から、文化の変容に関心を持っている人も歓迎したいと思います。それぞれの興味を活かしながら、自分のテーマを掘り下げて、それをわかりやすく伝え合えるような、そのようなゼミにしていきたいと思っています。

過去のゼミ論のテーマは多様で、ヨーロッパと日本の言語、美術、建築、思想、文学、歴史、食文化、庭園、都市、多文化共生、宗教が取り上げられました。担当者は多くの場合、適切な指導、助言を行なうと言うよりは、皆さんと一緒に勉強していく姿勢ですが、その中で、韓国や東南アジアを研究してゼミ論をまとめた人もいました。どのような場合でも、核になるのは「異文化の伝播、受容、変容」で、その中から新しい文化が形成されていくことに、関心があることを前提としています。

この趣旨は、文学テキストからアプローチする場合でも変わりません。ギリシア神話やキリスト教の聖人伝説に見られる「物語」が、文芸作品のみならず、歴史、哲学、絵画、彫刻、音楽、演劇、映像など多くの思想、芸術や、日常生活に深く影響していったかもしんに、私たちの文化や芸術、文学創造の個々の問題を様々な角度から取り上げて、皆さんと一緒に勉強していきたいと思っています。文化の伝播と受容、その変容、新しい文化の創成、それによって生まれた多くのものに関心のある皆さんは是非、一緒に勉強して行きましょう。



学生像

「異文化受容」「異文化交流」「文化変容」に興味を持ち、自分でテーマを決め、それをゼミの仲間たちにきちんと説明できるだけの調査・研究とプレゼンテーションをできるよう努力する人。

将来の活動フィールド

卒業生は様々な業種に職を得ているので、どの分野に進んでも、大学で獲得した「学ぶ姿勢」を仕事に活かせる人材になってほしい。

履修が望ましい外国語

必修の英語、基礎外国語を基盤に選択外国語等の履修によって、外国語への興味を持ち続けていることが望ましい。

ブリッジ科目

異文化受容と文学の変容／比較文学入門／ギリシャ・ローマ世界入門／ギリシャ・ローマの思想と文化

ゼミ・演習科目

【ゼミ】超域文化ゼミ（文化変容論）

【演習】時代の刻印／主題系の研究／世界のなかの日本のイメージ／アートコミュニケーション／創造の交流点／集合的アイデンティティ論

集合的アイデンティティの諸相

近代化ならびに現代化が進展するにつれ、伝統的な共同体志向は次第に稀薄化し、一般に個人主義化ないし個人化の流れが浸透することになりました。近代主義的な理念で言えば、われわれはあらゆる個別的状況を離れ、一個の個人として各種の事実判断と価値判断をしていかなければならない、ということになります。しかしながらその一方、一人ひとりの生は所属集団や帰属集団のありようの影響を強く受けます。また、諸々の集団が織りなす文化の力によって、諸個人の意識と行動の多くが左右されているというのも言うまでもありません。さらに近年、エスニックなものにせよナショナルなものにせよ近代組織的なものにせよ趣味的なものにせよ、さまざまなところで集合的な文化や集合的アイデンティティが目立つようになってきました。



このゼミでは、こうした集団の力、文化の力を十二分に見据えつつ、現代社会における集合的アイデンティティについて多角的に探究していきます。国民文化、地域文化、世代文化、性別文化、宗教文化、組織文化などおよそあらゆる文化は広い意味での集団をベースにしていますし、他方、文化的な堆積物を欠いた集団というものもまずあり得ません。集団の探究と文化の探究は相即不離の営みと行うことができます。

そして集団、文化、アイデンティティをキーワードに現代社会の集合的諸現象に挑んでいくに際して、このゼミで主として依拠する学問は社会学です。つまり、社会学的想像力を駆使して集合的アイデンティティ現象の数々を読み解いていく、というのが本ゼミの目標にほかなりません。そのために、まずは社会学という学問それ自体に関する基礎的な鍛錬が重要になってくるでしょう。ただし、一つの学問的基礎をしっかりと修めたうえで、さらにその一步先を目指し、学際的な視座を養って隣接諸学問との協働を行うのも、また学問的世界それ自体を超えて生活世界そのものへと帰還ないし飛翔していくのも、とても大切なことだと思います。

このゼミは文化構想学部・複合文化論系の超域文化プログラムの中に位置づけられます。それは大学の中で最も学際性の強い（その意味で非常に自由度の高い）プログラムと行うことができます。社会学を確固たる足がかりとしつつも、それを軽々と、みんなで越えていくことが可能かもしれません。人が喜びに震え、哀しみに涙するのも、ただ一人でそうしているわけではありません。たとえその場では物理的に一人きりだったとしても、そこにはさまざまな関係的、集合的、文化的な背景が存在しています。ゼミという集合的な場で知性と感性をともに磨いていくことが出来ればと念じています。

学生像

文化と社会の関係に対して探究意欲がある学生。好奇心の強い人。社会科学系と人文科学系にともに関心のある学生。あらゆる文化現象、社会現象に対して感性を研ぎ澄ませてアプローチしていきたい人。

将来の活動フィールド

メーカー・情報通信・マスコミ・金融などの一般企業、官公庁、教育・研究職など。

履修が望ましい外国語

とくに指定しないが、好きな外国語があるのが望ましいというのは言うまでもない。

ブリッジ科目

社会学概論1・2 / 社会学研究5（集団・組織論1） / 社会学研究6（集団・組織論2）

ゼミ・演習科目

【ゼミ】超域文化ゼミ（集合的アイデンティティの諸相）

【演習】集合的アイデンティティ論 / 若者、メディア、グローバリゼーション / 感性哲学 / 世界のなかの日本のイメージ / 時代の刻印

現代の文化哲学——美／死／エロス

わたしたちは生身の身体をもち、衣服を身にまとい、生きとし生けるものを食し、この大地に住まいを定めます。わたしたちは、見、聴き、味わい、触れることによってこの世界を生きているのです。しかしそれは、わたしたち個人の閉ざされた身体内の出来事ではありません。わたしたちは、他者と関わり共生することで初めてこの世界へと開かれた存在となります。他者を愛し憎み、共感しあい、やがて死にゆく存在、それがわたしたち人間です。このゼミでは、このように生身の身体とともに生き、この世界を他者と共有し、有限な存在であらざるをえないわたしたち自身の有り方を問題にします。

具体的な主題としては、以下のようなテーマ系があげられます。いずれも哲学的な基本テーマですが、同時にわたしたち自身の身近な具体的問題にかかわっています。【自己と他者】「わたし」とは何かという問いかけは、哲学的にものを考える出発点です。しかし「わたし」だけを孤立化させて考つづけても、けっきょく蝸壺に落ちこむだけでしょう。「わたし」とはつねに他者関係ぬきに考えることのできないような何かなのです。【時間と物語】わたしたちは物語る存在、言語的存在です。過去を記憶し、未来に想力を働かせるとは、言語的に物語を構築することにほかなりません。この意味でわたしたちは、時間的な存在でもあるのです。【空間と身体】わたしたちは、生身の身体的存在であることで、豊かな空間的意味を獲得します。いま現在、わたしのまえに開かれているありありとした知覚の風景をそのままに記述すること、そのような現象学的方法によって「視る」という原初的営為の意味が露わとなるのです。【エロスとタナトス】この世界の現実に触れ、他者と共鳴しあい、わが身を共振させること、それが感情です。なかでも愛（エロス）は、わたしたちにとって、さまざまな感情の中核をなしていると考えられます。他方、わたしたちが生身の存在であるということは、つまりわたしたちが死すべき存在であり、「終わり」ある有限な存在であるということです。わたしたちが自己の存在を問い、哲学という営みが始まるのも、まさに死を死として自覚するときでしょう。このように、わたしたちの存在の根底にある欲望は、「エロスとタナトス（愛と死）」の名で呼ばれてきましたが、哲学者によって思索され、詩人によって直観的に歌われてきたこのテーマを、「愛と死の解釈学」として研究していきます。【美と創造性】カントという哲学者は、日常的なさまざまな関心を遮断するとき、美しいものを純粋に観照する経験が開かれると説きました。また現代の哲学者オスカー・ベッカーは、「美のはかなさと芸術家の冒険性」について語っています。とらえどころなく移ろう美的現象と、新しい価値を創造する芸術家、この両者はわたしたちの生を豊饒で奥深いものにしてくれます。



学生像

当たり前の日常に目をむけ、耳を澄まし、その細部にふれる感触を味わうことのできる人。性愛と死、他者と私、言語と感覚など、哲学的テーマに関心のある人。芸術を初めとする、人間のクリエイティブな領域に浸かりたい人。

将来の活動フィールド

哲学・美学・芸術学関係の大学院進学、出版・マスメディア、映像制作会社、中学高校教員、公務員ほか。

履修が望ましい外国語

特に指定しない。

ブリッジ科目

文化の哲学／感性の哲学／美学／美の諸相／死の諸相

ゼミ・演習科目

【ゼミ】感性文化ゼミ（現代の文化哲学）

【演習】感性哲学／感性文化基礎論／視覚文化論／聴覚文化論／現代哲学の諸相／美学研究

高橋利枝先生

メディア・コミュニケーション論——グローバル化とメディア・AI（人工知能）

私たちはこれまで経験したことがないような変動する世界に生きています。加速するグローバル化とデジタル化、AI（人工知能）化によって、日常生活はチャンスとリスクに満ちています。このゼミでは、このような時代を生きるゼミ生のために、①グローバル化、デジタル化された現代社会におけるチャンスとリスクについて理解を深めるとともに、②コミュニケーション能力を身に付けることを目標としています。

現代社会においてメディア（ソーシャルメディアやAIを含む）は、ビジネス、政治、経済、教育、医療、スポーツなど至る所に入り込んでいます。携帯電話やインターネットは私たちの日常生活において様々な人や文化を結びつけ、グローバル化を推し進めています。このゼミでは共同プロジェクト（YMG: Youth, Media and Globalisation）を通じて、現代のグローバル社会における科学コミュニケーション技術の発展によって得られるチャンスとリスクについて明らかにしていきます。

授業ではまず、グローバル化された現代社会を理解するためにグローバル化に関する文献、またデジタル化やAI化を理解するためにメディア・コミュニケーションやAIに関する主要な文献の講読やリサーチを行います。そしてゼミ生各々の関心分野によってグループにわかれ、プレゼンテーションを行います。この時、ゼミ生全員は積極的にディスカッションに参加することが期待されます。グループワークによって基礎的な知識を習得し共有すると同時に、スマートフォンやソーシャルメディア、AIやロボットの利用に関する街頭インタビューやビデオ制作、メディアやIT関係者とのディスカッション、企業とのコラボレーションや他大学との合同ゼミなど様々な実践的な活動も行なっていきたいと考えています。このように本ゼミでは理論的かつ実践的にグローバル社会におけるメディアやAIの社会・文化的役割について理解し、グループワークやプレゼンテーションを通じて各々のコミュニケーション能力に磨きをかけることを目標としています。



学生像

グローバル・リテラシー（語学力、デジタル・リテラシー、コミュニケーション能力）に優れている人。異文化や他者を尊重し、相互理解に努め、よりよいグローバル社会の構築を共に目指す人。グローバル人材。

将来の活動フィールド

マスコミ（テレビ局、新聞、出版）、広告、商社、情報通信、メーカー、金融、大学院進学（海外を含む）、国際機関

履修が望ましい外国語

特に指定しない。

ブリッジ科目

グローバル化とメディア／社会学概論1・2／文化人類学の最前線1・2／異文化の伝播と受容

ゼミ・演習科目

【ゼミ】感性文化ゼミ（メディア・コミュニケーション論）

【演習】メディアと異文化コミュニケーション／広告にみる異文化コミュニケーション／若者、メディア、グローバル化／多文化社会論

進級者受入方針

複合文化論系は、言語文化、人間文化、超域文化、感性文化の4つのプログラムから構成されており、これらのいずれか、もしくは複数の分野に興味を持ち、複雑に関連する現代社会の諸要素を、共時的、通時的視点から考察して、時代を予測し困難を切り開く洞察力、広い視野に支えられた知識力、現実の課題を分析し対処する実践力の涵養を志す学生の進級を希望する。上記の4つのプログラムは、一見多様に思われ、事実その通りだが、相互に緊密に関連し、「地域や時代、既成の学問分野の枠を超え、文化圏間の関係分析や比較研究を通して人間が織り成す文化の複合的な構造を解き明かす」という複合文化論系の基本方針を様々な面から支えている。

教育課程編成方針

2年次

「地域や時代、既成の学問分野の枠を超え、文化圏間の関係分析や比較研究を通して人間が織り成す文化の複合的な構造を解き明かす」という複合文化論系の基本方針を踏まえながら、開設された、多岐にわたる内容の複合文化論系演習を履修し、本論系の教員も多く担当している文化構想学部、文学部のブリッジ科目の中から興味ある科目を選択しながら、3年次からのゼミ進級に備えられるようにする。論系の教員や、助手が論系室で相談に応じながら、4つのプログラムにそれぞれ、2～4設置されたゼミに進級するか、論系内の教員が指導して、自分で研究を深めて、その成果をまとめる卒業研究を選ぶかを決めてもらう。

3年次

言語文化、人間文化、超域文化、感性文化の4つのプログラムに、それぞれ2～4ずつ設置されたゼミに進級したか、もしくは論系内の教員の指導のもとに個人で研究を深めていく卒業研究を選択した後なので、ゼミ論、もしくは卒業研究と深く関係する、演習、講義を履修するのはもちろん、論系内に用意された他の演習や、文化構想学部、文学部共通のブリッジ科目からも多くのことを学びながら、ゼミ論、卒業研究の構想をまとめ、その材料を集めて、文献などの資料読解や、フィールドワークの手法を担当教員から学んで行く。3年次生の大きな関心の一つは、卒業後の進路であり、就職や大学院への進学に関して、ゼミや論系室を通して、先輩たちの体験を聴き、助言が得られる機会を設ける。

4年次

4年次生の最大の眼目は、卒業後の進路を決め、ゼミ論、卒業研究をまとめ、提出することである。社会に巣立って行く4年次生に対し、ゼミ担当の教員、卒業研究の指導教員から、研究方法、論文のまとめ方、社会生活の心構えなどが、助言される。その際の指針となるのも、「地域や時代、既成の学問分野の枠を超え、文化圏間の関係分析や比較研究を通して人間が織り成す文化の複合的な構造を解き明かす」という複合文化論系の基本方針であろう。資料解読、フィールドワーク、論文作成、ゼミと演習の発表等のプレゼンテーションを通じて得られた経験、知識は、就職もしくは進学後の社会的、個人的活動に大いに役立つものと思われる。

2022年度ゼミ論文題目

酒井ゼミ

多元的なフェイスにもとづくポライトネス / 日本語否定間投詞「いいえ」「いえ」「いや」「うん」の相互行為における働きの差異 / シラビーム方言と民謡の関係性 / 助動詞『そうだ』の付加による形容詞文の判断者の変動

陣野ゼミ

色名と日本文化 / 生活圏内の文化の活用 / ジャポニズムと芸術文化の発信 / 「打ち言葉」の表記・意味の多様性 / 日本における散る桜のイメージ / 意味の変化と不可逆性の関連 / 切腹・心中に対する韓国人の認識とその背景 / ジェンダー不平等から考える日本人女性のキャリア

寺崎ゼミ

廃校活用に求められる役割—地方創生、経済振興を通じた地域との関わり— / 観光地浅草の新たな街づくり——浅草を介したイメージと実態からみる未来の観光地の在り方—— / ドヤ街は不幸か——寿町の人々の生活実態から—— / 日本人にとって富士山とは—現代の日本人が富士山に持つイメージを銭湯ペンキ絵から考える— / ステレオタイプを背負わされる当事者たちのイメージとの向き合い方—京都の人たちの京都や京都人に対する意識から考える—

國弘ゼミ

令和時代の西国三十三所に関する多角的考察 —アフターコロナへ向けた展望— / 在日ムスリム女性として生きる —東京ジャーミイでの「語り」から— / 色彩における西洋文化の表現と受容 —ミュージカル『オペラ座の怪人』の舞台衣装から— / 住んでいる地域への愛着を持つ—相模原市のまちづくりから考える— / 魅力ある都市公園とは——利用者の愛着を育む公園づくり—— / 雑誌『ポパイ』における読者への振る舞いの変化 / 手づくり市のエスノグラフィ東京都調布市の事例から / ユニバーサル・スタジオ・ジャパンの魅力 ——TDLとの比較を通して—— / 看護師と大学生の死に対する認識について

松前ゼミ

ベーシックインカムは新しい社会保障になりえるか / 職場における LGBT 施策の課題と展望 / 政策上の高度人材と日本の私企業における高度人材の活用実態の比較 / 「良い」公共広告とは—「寛容ラップ」にみる、広告表現がもたらす視聴者への影響— / コロナ禍における「住まい」の意識・役割変化 / 「日本の若年女性における過度な痩せ願望ともたらす弊害」～なぜ若年女性はそこまで“痩せ”たがるのか～ / 日本におけるブラジル人移民の現状 / 日本経済におけるITの潮流とそれに伴うICT教育の現状 / ジェンダーの視点から見る国際移民問題—フィリピン人女性の事例から / モータースポーツの歴史と課題 / 日本人と在日朝鮮人の共生の可能性 / 学生を対象とした福島県双葉郡葛尾村で実施される公共ツーリズムについて

箕曲ゼミ

「ゆるさ」が育む異文化交流——埼玉県越谷市に通うベトナム人留学生に注目して—— / 聴者中心社会を問い直す——ろう児へのノンフォーマル教育の実践に注目して——

坂上ゼミ

オディロン・ルドン 現実と幻想の共存 ——花の作品を中心として—— / ジャン・ヌーヴェルによるガラスと光の建築 / ガブリエル・シャネルと新時代の女性像 / フランク・ゲーリーの建築と都市の興隆 ——「ビルバオ・エフェクト」を中心に —— / ロセッティの芸術における愛の表象について / モーリス・ユトリロの絵画における「白」と祈りの表象 / 印象派の描いたロンドン——モネとピサロを例に—— / エドガー・ドガの「踊り子」の表現について / 芸術の都パリの景観とその形成 / クロード・モネにおける〈睡蓮〉連作

宮城ゼミ

日本のコロナ禍における観光政策と人々の旅行意欲の変化 / アイドルテキスト分析実践 ——消費財としての成長物語—— / 現代日本におけるアフタヌーンティーの位置付け / サブスクリプション・サービスが作品制作業界に与えた影響 / 日本文化の何がフランス人を惹きつけるのか ——19世紀ジャポニスムから現代クールジャパンまで—— / 競技かるたの歴史と普及 / フルクサスの日本人女性 ——前衛芸術における役割—— / コロナが日本の観光にもたらした変化 / 色彩の持つ役割と意味——女兒向けアニメ『プリティーリズム・レインボーライブ』を中心に—— / ゲーム実況及びソーシャルメディアがゲームに与える影響について ——ゲームの変容と今後の展開—— / 西洋と日本の「見るなの禁止」における相違点・共通点と宗教思想の関係性——性別観・家族観の言説を中心に—— / 現代日本における宗教機能の分業——ゆるやかな信仰の必要性—— / ディズニープリンセス映画のヴィランズ——ヴィランズ描写の時代的变化について—— / オタク文化の変化と拡大

山田ゼミ

日本の教育の諸問題——教育格差を中心に—— / 日本の自殺———男性の失業に見られる自殺——— / 現代日本人の幸福感——幸福の感じ方の観点から—— / 身体感覚を伴う余暇活動の研究——余暇の目的意識を考察する—— / 日本における恋愛と結婚 / 組織アイデンティティ論の展開 / テレワークと国民性 / ひとり親家庭における貧困——階層再生産と子どもをめぐる諸問題—— / 観光まちづくりと地域ブランディング——交流による地域活性化の可能性—— / ストーリーミングの普及と音楽体験の変化

小林ゼミ

「人間」をむき出しにする芸術——アール・ブリュットにおける地域差の源とは？—— / 現代における地下アイドルシーン 構造の考察 / アニメ文化が宗教イメージに与える影響——「セカイ系」アニメの考察を通じて —— / 現代の「性的逸脱」について ——エロティシズム論の観点より—— / 『ファニーゲーム』における観客の参加とはどのような現象か / 武満徹の音楽観

高橋ゼミ

デジタル活用による日本の幸福度向上に向けて / 若者の購買行動と SNS の利用から考えるデジタルマーケティングのありかたについて——ファッション業界の EC化に着目して—— / 妖怪の変遷——信じるものからフィクションへ—— / 中国社会における「寝そべり主義」の定義及びその形成理由について / Instagramが外見の意識に与える影響 / 美容・健康商材のYouTube広告が与える不快感について

現代日本における若者がどの程度 ビートルズを受容しているのか——またその理由の考察—— / 東京ディズニーリゾートにおける AI・ロボット活用の可能性について / 読売ジャイアンツに対するミソジニー ——巨人軍のあるべき姿—— / SNS と消費行動からみる今後の実店舗の在り方 / Society5.0 時代における人間と AI のあるべき関係性について / 韓流の定着とその背景 / スマホ社会における娯楽について ——マンガと公営ギャンブルを中心に—— / ジャニーズアイドルにおける「男性同士の絆」について / デジタル化に伴い衰退する珠算教育と今後の可能性 / イラスト生成 AI によるイラストレーターの業務の代替可能性と両者の展望について

複合文化論系室について

開室：火・水・木（授業期間中）

10:30～16:30（助手が在室）

休業期間中は不定期

場所：戸山キャンパス33号館8階808号室

（複合文化論系室）

Tel：03-5286-3597（内線：72-3583）

E-mail：info@fukugo-waseda.jp

Web：http://www.fukugo-waseda.jp/

Twitter：@fukugowaseda

*お問い合わせはE-mailをご利用ください。

文化構想学部HP複合文化論系紹介：

<https://www.waseda.jp/flas/cms/about/theoretical/isoc/>

ゼミ要項（ページ最下部）：

https://www.waseda.jp/flas/cms/students/seminar_thesis/

複合文化論系HP論系概要：

<http://www.fukugo-waseda.jp/aboutus/>

（過年度のゼミ論文・卒業研究題目一覧あり）

